

平成25年大学の世界展開力強化事業報告書

「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」

神戸大学大学院保健学研究科
地域保健学領域 博士後期課程1年
澤 龍一



報告書

1. はじめに

2013年10月1日から2014年3月31日の6か月間、インドネシア、ジャワ島のジョグジャカルタ市に滞在しガジャマダ大学と神戸大学大学院における学生交流プログラムに参加した。滞在期間中さまざまな地域保健活動の視察を行った。スーパーバイザーである教授 Sunartini Hapsara、Dr.Herini、日々サポートをしてくださった Ms.Elsi をはじめ、協力していただいた先生・学生との出会いを通して、インドネシアの文化に触れるとともにさまざまな地域保健活動を見学することができた。具体的にはガジャマダ大学に隣接しているサルジト病院、地域保健の主体となるプスケスマスの見学、また災害地としてメラピ山噴火による被災地域の見学、地震被害のあったパントゥール地域の見学をすることができた。また被災地域内に設立された「子どもの家」の見学を行い、Dr.Nia、Dr.Elni、Dr.Ippe には栄養失調の子供のための施設、幼稚園でのスクリーニング、特別支援の必要な子どもの発達支援センターなどの地域診療を紹介していただき同行することができた。またインドネシア語・日本語・英語の語学に関する講義に出席、語学学校に通うことで語学の勉強にも努めた。他専門学校や他大学でガジャマダ大学にはない理学療法士養成課程の見学や理学療法士のクリニックを紹介して頂くなど、看護学だけではなくリハビリテーションについても多くを学ばせて頂いた。最後にはガジャマダ大学で毎年開催されているセミナーに参加して、インドネシアで学んだことを発表させて頂く機会も頂けた。勉学だけではなく、ジョグジャカルタ市やジャワ島の観光地訪問もさせて頂き、様々な体験を通して学んだ内容についてここに報告する。

2. 本留学プログラムについて

1) 目的

大学で修得した医学・保健学分野における知識及びスキルを、実地体験を通じて活用し、より実践的なスキル、チャレンジ精神とコミュニケーション能力を養う。これにより、世界標準の専門能力及び ASEAN 諸国の課題への的確な問題解決能力を有するグローバルな人材の育成につなげるインドネシアガジャマダ大学と神戸大学との協働プログラムである。

2) 派遣期間 2013年10月1日から2014年3月31日（6か月）

3) 派遣先 インドネシア

4) 提携大学 ガジャマダ大学

5) 担当教員 Sunartini Hapsara 教授、Dr. Elizabeth Siti Herini 教授、Elsi Dwi Hapsari 教授

Wiwin Lismidiati 講師、Sri Hartini 講師、Anita Herawati 事務職員

6) 指導教員 Dr. Elizabeth Siti Herini 教授、Elsi Dwi Hapsari 教授

3. 留学プログラムの活動報告

本留学プログラムにおける体験について各活動を通して学んだ事項を以下報告する。

1) 留学開始後準備段階期間として

(1) キャンパスオリエンテーション

- ・10/2（水）-10/3（木）、大学内、大学周辺におけるオリエンテーション（Ms.Sri Hartini より）
- ・10/23（水）、大学内図書館の使用について（Ms.Anita Herawati より）

学び:

ガジャマダ大学（以下 UGM と略す）は 1949 年設立のインドネシアで最も古い大学であるとともに、学生数 157000 人以上、教員 2200 人以上を収容する国内最大級の大学である。また、2013 年には国内 1 位の成績を掲げ優秀な人材を数多く卒業させている一流大学である。ジョグジャカルタ特別州の州都ジョグジャカルタのほぼ中央に広大な面積を持っており、現在 18 学部、73 学科、62 研究科を有している。初めて訪れたときは、あまりの大きさにとても驚いた。滞在先のホテルのすぐ真横

から UGM の敷地であったが、所属する医学部看護学科までは徒歩 20 分はかかる。Ms. Sri Hartini によって 10 月初旬に大学敷地内やその周辺で生活上最低限必要な場所（看護学部、食堂、近くのスーパーマーケット、コンビニなど）を案内していただいた。特に昼食に利用する食堂の使い方は日本とは違い、町のいたるところに点在する飲食店（ワルン）のような形式であった。店頭に並べられているさまざまな種類の料理を自分で皿に盛る。最初は日本との注文方式の違いに戸惑ったが毎日のように利用した。値段も 1 食 100 円程度でとても安かった。インドネシア料理は香辛料が多く使用されている。中にはとても辛いものもあり、食べては腹痛に見舞われることもあったが、ミーゴレンやナシゴレンなどほとんどのものが美味しかった。料理でもインドネシアの地域によって味が少しずつ異なることや、伝統料理も異なることも教わった。ジョグジャカルタはインドネシアの中では甘めで濃い味付けであり、グッダというジャックフルーツの甘辛煮は市民に大変好まれている伝統料理であるという。万人にうける味とは言えないが、個人的にはおいしく頂き、後日一人で連れて行って頂いた店に行き、同じものを食べたことを覚えている。

また、10 月後半には看護学部事務局員の Ms. Anita が大学図書館を案内してくれた。インターネット使用のための Wi-fi の ID を取得していただき、学部内ではそれを使用することもあったが、ネット環境は日本と異なり大変悪かったため、文献検索などは主に自宅（ホテル）で行うことのほうが多かった。図書館はとても広く書物や雑誌も豊富で、多くの学生が常に出入りしており、勉強する環境としてはとても有効な場所であるように感じた。

(2) 言語について

- ・ 10/8（水） 9:00-12:00, 日本語クラス(大学 4 年生向け Ms.Elsi より)
- ・ 10/11（金） 8:00-10:00, 日本語クラス（大学 4 年生向け Ms.Elsi より）
- ・ 10/21（月） 9:00-12:00, インドネシア語(Ms.Itsuna より)
- ・ 10/22（火） 13:00-15:00, インドネシア語(Ms.Itsuna より)・
- ・ 11/21（木） 15:00-16:30, 英語クラス（大学 1 年生向け Ms.Elsi より）

学び:

インドネシアは 17500 もの島から成っており、約 300 もの民族が存在する。そのため共通語としてインドネシア語が使用されているが、ジョグジャカルタ州をもつジャワ島は主民族がジャワ民族やスンダ民族であり、ジャワ語やスンダ語などの言語が主流である。共通語としてのインドネシア語の授業は 2 回 Ms.Itsna によって教授していただき、簡単な挨拶から、基本的な文法などを教わった。英語の資料を用い、文法に関する私の質問にも疑問が解決するまで文例を追加しながら教えて下さった。そのため基本的な文法や単語は少し習得することができた。また、他言語の授業として Ms.Elsi が看護学生 1 年生や 4 年生に教授する日本語や英語の講義にも出席し、インドネシア語でこれらの言語を説明する中、私は逆の立場でインドネシア語を習っていた。この他に、個人的にガジャマダ大学近くにある語学学校に 4 ヶ月通い、インドネシア語を習得することにつとめた。流暢に、とは言えないが、学外活動をする際にインドネシア語で挨拶や簡単な質問をすることで、あちらはとても嬉しそうに対応をしてくださり、一種のアイスブレイクの役割をしていた。最終的にはセミナーで自己紹介をインドネシア語でして参加者から讃美を受けたことは語学の勉強をした成果の一つと感じている。

2) 地域の保健見学と視察

(1) 病院見学

- ・ 10/17（木） 13:00-17:00, サルジト病院小児科病棟にて Dr. Herini の診察見学(Dr. Herini より)
- ・ 12/27（金） 11:00-13:00 ガジャマダ大学附属病院の見学 (Ms.Elsi より)

学び:

ガジャマダ大学に隣接するサルジト病院小児科で Dr. Helini が担当している 3 名の患児の診察見学を行った。サルジト病院小児科の入院部屋は 3 つのタイプが用意されていた。偶然にも、3 名がそれぞれの 1 名ずつ部屋のタイプが異なっていたため 3 種類の入院環境を見ることができた。入院部屋は個室、3 人部屋、4 人部屋とタイプがあり、それぞれ患者の希望（経済状況）によって選択できる。この点は日本と同じであるが、入院環境としては、日本の病院機能評価に基づく環境とは全く異なっていた。大部屋の場合はベッドの区画なども定まっておらず、個人のスペースもはっきりと決まっていなかった。またカーテンによる仕切りもなく、付き添家族のスペースも確保されているとは言い難い状況であった。授乳中の母親は、他付き添いの家族がいても全く気にせず、またそのことを他の患者家族が気にしている様子も見受けられなかった。診療見学した患児は 6 か月の水頭症の男児、感染症により意識不明の 5 歳の女児、ビタミン K 欠乏により頭蓋内出血をきたした 1 か月の女子である。3 名とも治療経過は順調とのことであった。Dr. Herini は家族の質問を丁寧に扱い、家族からは笑顔が多くみられていた。短時間の見学からでも医師・看護師のチームワークの良さが見てとれ、また家族との良好な信頼関係が伺えた。患者家族同士でも大部屋の場合、コミュニケーションをよくとっており、日本の病院におけるプライベートの確保の重要性とはまた違った感覚を覚えた。感染防止については徹底することの重要性を感じるものの、お互い助け合える関係を築くという意味では、仕切りのない環境の良さもあるのではないかと感じた。



(2) 公的保健機関見学

- ・ 10/4（金） 10:00-12:00, プスケスマスにて WHO プログラム ICHS の実践実習の見学（修士課程 1 年目小児看護学領域の学生（Ms. Sri Hartini）
 - ・ 10/21（月） 18:00-18:30, バンツール市におけるプスケスマスの見学（Ms. Elsi）
 - ・ 11/14（水） 10:00-12:00, バンツール市におけるプスケスマスの見学（Ms. Elsi）
 - ・ 11/19（木） 15:00-16:00, ジョグジャカルタ市内子ども発達支援センターの診療見学（Dr. Elni and Dr. Ippe）
 - ・ 11/29（金） 15:00-17:00, ジョグジャカルタ市内子ども発達支援センターの診療見学（Dr. Elni and Dr. Ippe）
- 学び：

プスケスマスは日本でいう保健所や保健センターである。しかし、日本の保健所とは違い、診療・入院施設（入院施設は地域により有無が異なる）薬局、歯科の機能もある地域の診療施設である。今回 2 か所のプスケスマスを訪問した。ジョグジャカルタ市に隣接する地震被害の大きかったバンツール地域には 27 のプスケスマスが存在し、そのうち私が見学した場所では 24 時間体制で患者の受け入れをしていた。2 人の医師と 7 人の看護師が配置され、理学療法士も 1 人配置されていた。設備環

境は病院よりも劣り、行うことができる治療も限られてくるが、病院の機能も果たし、また保険の有無にもよるが、とても安い診療代でかかることができるブスkesmasは住民にとって大変重要な役割を果たしていることがよく分かった。患者側の立場から、同じ場所に行けば信頼できる医師や看護師がいる場所という点では地域に根差した診療の原点であると実感した。医療の分業化が進む日本においては効率的である一方で患者の立場という点が疎かになる危険もある。このような地域に根ざした医療環境の大切さも忘れてはならないと感じることができた。

また、発達に関して特別な支援が必要な子どもたちに金銭的な負担がなく医師から診察を受けることができる子ども発達センターの見学を3回行うことができた。貧困指数が高いインドネシアにおいて継続的な支援を必要とする子どもたちが、最小限の金銭的負担で診断や継続支援を受けることができることは大変意味があることだと感じた。



(3)メラピ地域の視察

- ・ 10/15: メラピ山の噴火被災地の復興状況の視察(Ms. Elsi) 写真左
- ・ 10/19: メラピ山博物館見学(看護学科4年生とともに) 写真右

学び:

メラピ山周辺地域の視察を行い、自然災害の恐ろしさと、自然と共存する上で地域保健に携わる医療従事者の使命について考えさせられる機会となった。実際に活火山は日本にもみられる。しかし、私自身はこれほど大きな被災経験がなく、実際に今回メラピ山を目の前にしてもあまり被災の恐ろしさを実感することができなかった。しかし、災害のひどかった被災現場の見学で、落下してきた大きな岩が道路の真ん中で動かされずに残っている場所や、火山灰が今なお塵積もっている家屋、仮設住宅やその後政府によって立てられた新しい区画を見るとその被害の大きさと大変さを知ることができた。また、同時にメラピ山の噴火の歴史を知ることができる博物館にも行き、噴火時の様子のショートフィルムや被害を受けた場所にあったさまざまな家庭用品を目の当たりにし、自然災害の脅威を感じた。大地震や火山の噴火、洪水など様々な自然災害が報道されても、大きな被災体験をしたことがない私にとってはいつもどこかで他人事のような気持ちしか持てない部分がある。逆に、被災した人の気持ちは被災者にしかわからないし、簡単に共感したような気持ちにもなってはいけないと思う。しかし、地域保健にかかわる一人の従事者として、自然とどう共存し、被害を受けた場合の被災をどうすれば最小限に抑えることができるのか考えていくこと、そのためには様々な被災現場を見学しそこから考えることがとても重要であると感じた。



(4)チルドレンズハウス見学

- ・ 10/21: 今後の見学依頼 (Ms.Elsi)
- ・ 11/20: 定型発達児のスクリーニング (Dr.Elni と Dr.Ippe)
- ・ 11/27: 理学療法の見学 (Ms. Elsi) 写真左
- ・ 12/13: 活動内容の見学と大学院生における母親教室の見学 (Ms.Elsi)
- ・ 12/24: 5 周年記念セレモニー、活動内容の見学 (Dr. Sunartini Hapsara, Ms.Elsi、高田哲教授) 写真右

学び：

地震により被害の大きかったパンツール市内に神戸大学が協働で設立した子どもたちとその親たちの施設見学を行った。見学時行われていた活動は毎週月水金 3 回にわたる 5 歳以下の子どもへの保育である。そのほかにも発達遅延の子どもたちに対しての理学療法や発達支援が行われていた。保育では子どもたちが子どもたち同士で触れ合う場という役割だけでなく、同じ年ぐらいの子供を持つ母親同士のコミュニケーションの場となっており、子どもの発達を支援する上で大変意義のあることであり、このような場所を確保することの必要性を感じた。理学療法は週に 2 回、病院から派遣されてくるとのことであった。貧富の差が激しい国において病院を受診できない人にとって、本施設はその地域の医療を支えていると感じた。



3) その他の活動

(1)インドネシアの理学療法

- ・ 10/17: サルジト病院における理学療法見学 (Ms.Novy)
- ・ 10/19: Ms.Novy 経営の小児専用のクリニック見学 (大学 4 年看護学生とともに)
- ・ 12/2: 理学療法士養成大学の見学[Academic school for physiotherapy'YAB'] (Ms.Elsi)

・12/5: 理学療法養成大学の教員と対談 (Ms.Neni)

学び:

サルジト病院では毎日何十人もの患者がリハビリを受けに通院している。理学療法室は日本の病院とは異なり、殺風景で器具なども散在している印象を受けた。見学では主に小児の患者を見学した。発達遅延の子どもたちには神経を刺激するためのマッサージが実施されており、通院患児の多さに驚いた。見学開始時はかなり手荒い印象を受けた。しかし、神経を刺激するためには重要であるとのことであった。説明して下さった Ms.Novy は個人経営でクリニックも開業していた。経済的に厳しい家庭に生まれた疾患のある子どもたちに対しても理学療法を受けさせてあげたいという目的から自ら小児専門のクリニックを設立していた。そのクリニックも見学させてもらったが、毎日 20 人以上の患者が訪れ、理学療法士は 7 人勤務していた。とても家庭的な雰囲気でカラフルなつくりは病院とは異なり子どもの環境に適していると感じた。Ms.Novy からの話や、理学療法士の養成大学での話からも、まだまだインドネシアで理学療法士は数が少なく認知度も低いことが分かった。その一つの原因として、まだ国家資格でないことが大きく挙げられると思う。また近年まで感染症予防・治療がメインであり、リハビリテーションが重要視されていなかった背景も大きい。しかし近年、目覚ましい医療の発展とともに、感染症対策も着実に進み、平均寿命も延長している。その反面、いわゆる non-communicable disease 有病者が増加しており、今後リハビリテーションの重要性が増してくるように感じた。その際に、何か関わることがないか、模索していきたい。



(2) セミナーへの参加

- ・3/21-23: スマトラ島にある理学療法養成校でのセミナー参加、発表 (Ms. Elsi)
- ・3/27-28: ガジャマダ大学であるセミナー参加、発表

学び:

留学の最後になり、2つのセミナーに参加する機会を頂いた。一つは理学療法の養成校で日本の理学療法教育について、もう一つはインドネシアでの経験を踏まえて感じたことをまとめて発表させて頂いた。理学療法教育について話す以前に、日本における理学療法と言う分野が確立してきた歴史の変遷を知らなかったため、私もとても勉強となる機会であった。また国家資格でないことに始まり、開業できることなど大きく異なる部分があり、単純に比較は出来なかったがそれぞれ良い部分と悪い部分があり、全て先進国が優れていると言う視点は間違っていると感じた。養成校であり、ガジャマダ大学では出来ないディスカッションを教員及び学生と出来て、楽しい時間を過ごすことが出来た。ガジャマダ大学でのセミナーではインドネシア滞在中に経験した噴火と地震の体験と、それに対しての避難の仕方に日本とインドネシアでは違いがあるということを発表した。自己紹介をインドネシア語でしたことで聞きに来ていた学生から笑いを取れたことは何よりも嬉しかったが、その後の発表は専門分野でないため出来が良いとは言えない内容であったのが残念である。しかし今回、専門分野でない中で調べていくことで、防災や災害が起こった際の対応について、考える機会が出来たのは有益であったと思う。



(3) 文化活動

- ・ 10/6: バダントゥリトゥス訪問(Ms. Srihartini とともに)
- ・ 10/12-13: Bromo 山登山
- ・ 10/20: ビーチ観光(大学4年看護学生とともに)
- ・ 11/10: 隣接都市の観光 (Solo)
- ・ 11/11: ボロブドゥール観光
- ・ 12/7: プランパナン寺院観光
- ・ 12/25: ボコの丘観光 (高田哲教授、Ms.Elsi とともに)
- ・ 12/28: 友人 (インドネシア人) の結婚式に出席

学び:

様々な有名観光地に出向き、インドネシアの文化に触れることができた。主に週末にこれらの観光を行ったが、友人や先生方と共にこのような時間をもてたことで、インドネシア人の習慣や文化についてもより深く知ることができた。

